

## トミー理髪店

富井（トミー理髪店店主）  
福永（トミー理髪店常連客）  
井原（〃）  
杉田（〃）  
相葉（〃）

富井 井原の髭をあたっている。刷毛でシェービングクリームを顔の下半分に塗り、丁寧に剃刀を当てる。

富井 剃刀をしまい、蒸しタオルを作って井原の顔に広げる。

富井 「温度だいじょうぶですか？」  
井原 「ええ、はい、はい、だいじょうぶよ」

井原 気持ちよさそうに息を吐く。  
富井 「井原さん、風邪だったんですってね。杉田さんが」言いかけて道具をしまう。  
井原 「え？」

井原 「杉田さん？」  
富井 「ええ、心配してましたよ杉田さん。そんなに重かったんですか？」  
井原 「ああ」

井原 「いやあ、そうじゃないんだ。そうじゃないんだけどね」

富井 井原の蒸しタオルをゆっくりと剥がす。

井原 「怠いのが続いてよ、しばらく。だから、長かったんだよなあ、ちょっとしんどい  
なつてのが」  
富井 「じゃあ高熱が出るとかじゃあ、ない感じで？」

富井 井原の顔に化粧水をぱしゃぱしゃとつける。

井原 「熱はねえ、どうだろうねえ、へへっ、計ってないからなあ」  
富井 「あ、そうなんですか？」

富井 井原のこめかみや襟足などの剃り残しを確認する。

福永 入店する。長椅子に座り、適当な雑誌を見繕って過ごす。

井原 「うん、ちょっと熱っぽいなあと思ってもさ、ねえ、計らねえようにしてるんだよ。  
アレ、計るとホレ、一気に具合悪くなったりさ。実際、熱があつたりすつとき。ああやっ

ぱり、って。数字って、こう、ねえ、こっちをやたらに説得してしまうというか、あるでしょ」

富井 「ああ、まあ、そうですねえ」

富井 井原に軽くマッサージを施す。

井原「万歩計とかさ。そうだよ。そのそしたら家の事してるだけなんだけど、それで三千歩くらいいたりするとああ今日も運動したなあって。本当は一、んー、もうねえ、本当にのんびりやってるだけなんです。歩数知らないと、いやのんびりやってたなあって思うだけなんだわ。それが、何歩ですよ、って出るとね、いやあ頑張ったな、って、へへ」

富井 「はは」

富井 「あ、あの、栄養ドリンクとかの、タウリン2000とか3000とか。あれ単位は何なんだって思うでしょ。2000ミリグラムってつまり2グラムですからね。2グラムですよ。で、栄養食品とか、ミリグラムかと思えば今度はマイクログラムで書いてあったり」

井原 「……ああ、そお？」

富井 「でも気にしないですね、世間は。大事なものは数字で」

井原 「へへっ」

富井 「はい、お疲れ様でした」

井原 「はいはい、どうもね」

井原 「あ、どうも」

福永 「ああ、ご無沙汰してます」

井原 「いやあ、どうです、ご商売のほうは」

福永 「いやもう本当に、好きなことだけしてるのは気楽なもので……」

井原 「そうですか、いやいや」

福永 「はは」

井原 「僕も今度寄らせてもらおうかなあ」

福永 「ええ、ぜひぜひ」

井原 「はい、じゃあ」

福永 「ええ。お気をつけて」

井原 「はいはい〜」

井原 「じゃあ、トミーさん」

富井 「ええ、また。お待ちしてます」

井原 「どうもね」

富井 「お待たせしました」

福永 「いえいえ。こっちこそ予約もなしにすいませんね、繁盛店なのに」

富井 「またまた……」

富井 「どうされます？」福永の首にタオルと散髪用ケープを巻く。

福永 「うん、またちょっと短くして、毛先揃えてもらえれば」

富井 「わかりました」

富井 散髪道具を載せたワゴンをそばに寄せ、福永の髪をハサミでカットしていく。

福永 「井原さん、だいぶお年を召したというか」

富井 「ええ」

福永 「やわらかくなられて」

富井 「若い頃は学生運動なんてやられてたみたいですけどね」

福永 「ねー、今はずいぶんと」

富井 「すっかりガーデニングと野菜づくりが板について」

福永 「ふふっ、あ、そう」

富井 「ナスの自慢とか」

福永 「へえ〜」

富井 「取れすぎて、けっこうな量を干したって言ってました」

福永 「ナス干すんだ」

富井 「それでオイル漬けに」

福永 「ああ〜、いいね」

富井 「福永さんは料理されます？」

福永 「僕はね、あれ、スモーク」

富井 「燻製ですか」

福永 「燻製器から手作りで」

富井 「やっぱりそういう……なんでしょう、工業的というか」

福永 「そうね、インダストリアルなのが趣味と言えば、ああ、そうなるのかも」

富井 「お店もすごいつて聞きましたよ」

福永 「特にね〜、焙煎機がね」

富井 「ずいぶんと大きいんですってね」

福永 「いやあ、この夏は辛かった」

富井 「焙煎ですか」

福永 「そう、一日中だからね」

富井 「ほんとに夏の辛さは何とかならないかと、思いますね」

福永 「盆地はねえ、どうしても」

福永 「それでもここ最近は何、やっとなごしやすくなってきて」

富井 「そうかと思えば一気に寒くなりますね」

福永 「うちは焙煎室があったかいから」

富井 「暖房要らずだ」

富井 「一度、流します」

福永 「は〜い」

富井 福永を洗髪台へ導く。

富井 福永の顔にタオルをかけ、シャンプーをする。

相葉 入店する。

富井 福永の髪をざっとタオルドライし、元の席へ誘導する。

富井 「少々お待ちください」

富井 「どうぞ」

相葉 「はいどうも」

富井 「お元気でしたか」

相葉 「おかげさまで」

富井 「今日どうされますか」

相葉 「ああもう、いつも通りで」

富井 「はい」

富井 バックヤードへ行き、コーヒーを入れて戻ってくる。

富井 「福永さん、お待ちの間、どうぞ」

福永 「ああお気遣いなく」

富井 「その道の方にお出しするようなものじゃありませんが」

福永 「いやそんなそんな」

富井 「相葉さんも、どうぞ、コーヒー」

相葉 「いただきます～、お砂糖あったかな」

富井 「はい」

富井 相葉の頭部にバリカンを当てる。刃は2ミリメートルに設定。

福永 適当な雑誌を眺める。

相葉 「この店の本、ほとんど代わり映えがないでしょ」

福永 「え！ いや、ははっ」

富井 「よしてくださいよ」

福永 「まあでも確かに」

富井 「いや、恥ずかしながら……私がふだんそんなに読まないもので」

相葉 「漫画でも置いたら？」

富井 「漫画ですか。それも疎くて……」

福永 「まあまあ、僕はかまいませんよ」

相葉 「えー、でも、トミーさん言ったら置いてくれるでしょ」

富井 「ええ、まあ、そうですね。一冊二冊なら」

相葉 「あらもう終わっちゃった？」

富井 「ええ。髭もやっていますよね？」

相葉 「頼むよー」

富井 「このままで、お待ち下さい」

相葉 「あらら」

富井 福永の背後にずれる。

福永 「すみませんねえ」

相葉 「いえいえ」

富井 福永の肩をマッサージする。

福永 「ああ～、いい～」

富井 「お疲れですか」

福永 「う～ん、仕事はね別にたいしたことないんだけど、それ以外で気苦労が……あることも……あつたりで……」

富井 「そうですか」

福永 「こないだもね、その一、同じ町内で、線量計の貸出を申請した人がいて」

富井 「はあ」

福永 「いやあ、だってほら、ここもしも計測してみたら数値が高いんじゃないかなっていう場所でもね、測れないってことない、実際？」

相葉 「あるある」

福永 「個人の家にもね、なんか町内会で線量計貸し出しますよってというのがあつたりするんだけど、うん、やっぱり……借りられない」

富井 「ああ～」

福永 「測れない」

相葉 「測っていざ本物の数字を見ちゃうとねえ」

福永 「そうそう。見ると厄介なんですよ」

富井 「ああ……」

富井 「それまでのちょっとした不調とかがやっぱりこのせいなんだ、って、加速しちゃうんですかね。風邪の時の、体温計みたいに」

福永 「あー、そうね、そう。それもあるしやっぱり、町内でね、ウチはこれだけの数値であつちはこれだけ、とかになったらさ、神経質になっちゃうし。あんまり……、うん、体のこともあるけど。確かに、確かに」

福永 「まあ、そういうわけでウチでも奥さんと話し合ってみて、やめたほうがいいんじゃないってことにね」

富井 「そうですか」

福永 「うん」

富井 「数字って、妙に説得力持ちすぎるところがありますもんね」

福永 「そうなのよ」

福永 「そんな狭い範囲の数字だけ見ても何にもならないのに、人の心は動いちゃうからなあ」

電話が鳴る。

富井 「はい、トミー理髪店です。はい、はい、ええ、はい……」

福永 「相葉さん、わりとガツンとしたのがお好きでしたっけ」

相葉 「え？ 何、ふふ、何か良いのあるの」

福永 「コスタリカ、エル・アルコンのレッドハニー製法」

相葉 「品種は？」

福永 「カトゥーラとビジャロボス」

相葉 「何それ」  
福永 「ティピカのコスタリカでの突然変異種って言われてます」  
相葉 「へえー！」  
福永 「このビジャロボスってのがまあ酸味が上品で……」  
相葉 「で、ハニー製法」  
福永 「うん、そう、ミューシレージ七割残して乾燥」  
相葉 「ふんふん」  
福永 「煎りは中深（ちゅうふか）ってところだけど」  
相葉 「香りわりと複雑そうな」  
福永 「甘みがね、複雑。で、やっぱり完全なウォッシュドよりかは、クリーンさが控えめというか、スッキリというよりは、重厚ですね。コスタリカだからコクは深いし」  
相葉 「んなるほどね」  
福永 「相葉さん大好きですよ、絶対」

富井 「やあ、すみません」  
福永 「いえいえ」  
富井 「福永さん、仕上げちゃいますね」  
福永 「ええ、お願いします」

富井 福永の毛先に仕上げのハサミを入れていく。

富井 「何かお話されてました、ふたり」  
福永 「内緒話」  
相葉 「営業されちゃったよまた」  
富井 「相葉さんもお好きなんですっけ」  
福永 「この人はもうプロ」  
相葉 「まあ、そういう……。トミーさんもたまにはどう？ 福永さんどこ」  
富井 「私ですか？ 私はもう、横文字がずらーって、並んでるの見るだけでもう」  
相葉 「ありゃあ、そう？」  
富井 「目が回っちゃって」  
相葉 「まったく……」

富井 福永の首筋についた細かな毛髪をブラシで払う。

富井 「はい、福永さんお疲れ様でした」  
福永 「は〜い、ありがとう」

福永 「あ、じゃあ、お先に」  
相葉 「ええ、じゃあ近々」  
福永 「はい。トミーさんも、また」  
富井 「ええ」

富井 相葉の髭をあたる。

相葉 「トミーさんあと何年ここ続けるつもりなの？」  
富井 「え……どう、なんでしょうね。後継ぐ人間もいないから、なかなか……」

相葉 「そうは言っても死ぬまでやるわけにはいかないでしょうよ。だからあんたももうちょっと趣味がないと、老後がつらいよ」

富井 「剃刀、危ないですよ。喋らないでくださいね……」

富井 髭を剃り終わり、蒸しタオルを相葉の顔に広げる。

相葉 「今度行きましょ、やっぱり、福永さんどこ」

富井 「はあ……」

富井 相葉の蒸しタオルを剥がし、軽く肩をマッサージする。

富井 「お疲れ様でした」

相葉 「はいどうも」

相葉 「こういうとき、なんでやられたほうがお疲れ様って言われるのかねえ」

富井 「はあ、なんででしょうね」

相葉 「じゃあ、どうもねトミーさん」

富井 「ええ、お気をつけて」

相葉 「今度ね、福永さんどこ、ね、一緒に」

富井 「はあ、まあ」

相葉 「甘いのも置いてあるから、あの、ジェラート美味しいよ。趣味で始めてあそこまでやるんだから偉いもんだよ」

富井 「そうですか。甘いものなら、じゃあ」

相葉 「うん、ではでは」

富井 「はい」

富井 手慰みのように、散髪道具を整理する。

富井 バックヤードでインスタントコーヒーを淹れ、戸棚から菓子を取り出して食べる。

杉田 「こんにちはー」

富井 あわてて店の入り口へ。

杉田 「もう閉めました？」

富井 「いえいえ、ちょっと小休止、していたもので。どうぞ」

杉田 「すいません」

富井 手洗いをして、席に座った杉田のもとへ。

富井 「あ、さっき井原さんが」

杉田 「来ました？」

富井 「ええ」

富井 杉田の髪を触る。

杉田 「そうですか。具合良くなったんですね」

富井 「みたいです」

杉田 「なら良かった」

富井 「ええ」

杉田 「え、今日は、じゃあ井原さんおひとり？」

富井 「いえ、そのあと福永さんと相葉さんが」

杉田 「そうですか。良かった良かった」

杉田 「今日は白髪染め……」

富井 「あ、染めます？」

杉田 「うーん、していただこうと思ったんですけど、もうちょっと延ばそうかと。次来たときに、じゃあ、お願いします」

富井 「わかりました」

杉田 「今日は長さを」

富井 「ええ」

富井 杉田の髪にハサミを入れていく。

富井 「あ、おととい会いましたよ、香苗さん。開成山の、お伊勢さんのところでバツタリ」

杉田 「お腹大きかったでしょ。あれで今9ヶ月」

富井 「そんなになるんですか」

杉田 「子どもも、もう2200あるんですって。だから最悪、もう生まれちゃっても、ちょっと小さいくらいで済むそうで」

富井 「ああそうなんですか。外出てて大丈夫だったんですか？」

杉田 「あ、いや、ギリギリまで絶対安静なんてことはないそうで、病院がその、近くにあるなら」

富井 「そうですか」

杉田 「もうほんと、産気づいたら二時間位でするっと生まれちゃうそうです」

富井 「そんなもんですか」

杉田 「それで市の、産前産後のヘルパーが使えるようになる診断書とかね、準備するのに忙しいみたいで。まあ、運動がてらというのもあるんでしょうが」

富井 「へえ、産前産後の」

杉田 「産後は誰でも利用できるみたいで、それを産前にも利用できるように証明書だか診断書だかをって、らしいですよ」

富井 「そうですか」

杉田 「ええ」

富井 「じゃあそんなに神経質にもならず」

杉田 「ですねえ、本人は」

杉田 「逆にまわりが」

富井 「ピリピリしますか」

杉田 「いえね、他の親戚とか、娘夫婦の知人とかね、いろいろ言いますから。県外に出なくていいのかとか」

富井 「ああ、そういうことはね」



杉田 「そんな、本人たちだって何も考えてないわけじゃないんだから、彼女たちなりの家族計画とかもね、あるでしょうし、それをね.....」

富井 「数値で神経質になっちゃいますか、まわりが」

杉田 「数値っていうか、もっと漠然となんででしょうね」

富井 「線量計とかも、しばらくは話題に出さないほうがいいですね。ほら、町内で貸し出したり、あるじゃないですか。そういうの、測っちゃうと余計に神経質になる人もいますから」

杉田 「見ないほうがいい数字ってありますよね。風邪の時に体温を計らないほうがいいとか.....」

富井 「ええ」

杉田 「井原さん、具合よくなられて本当に良かったですよ.....」

杉田 「今度、ナス作りのコツをね、伺いに行こうかと」

富井 「杉田さんは、趣味があって、お孫さんもできて、老後が充実しますね」

杉田 「ええ、あは、老後ですか？」

富井 「髪、洗いますね。こちらへどうぞ」

富井 杉田の髪を洗う。

富井 杉田を元の席に戻し、頭部と肩のマッサージを施す。

富井 「お疲れ様でした。.....これって、なんでマッサージした人間が、言うんでしょうね」

杉田 「ああ、そうですね。妙ですね」

富井 杉田の髪の仕上げをし、首元をブラシできれいにする。

杉田 「妙ですけど、終わりました、って言うより、柔らかい感じがしますね」

富井 「そうですか」

杉田 「ええ。ここままで終わりですって合図をしなきゃならないなら、優しい合図がいいですよ」

富井 杉田の後頭部に鏡をかざす。

杉田 仕上がった頭部の全体を眺めて満足する。